

【晉紀十七】 起玄默執徐，盡強圉作噩，凡六年。

■東晉、▲前燕、（続国訳漢文大成 經子史部 第 6 卷 66p）

顯宗成皇帝中之上鹹和七年（壬辰，332年）

■春，正月，辛未（15日），大赦す。

後趙 **〔石勒の神武の謀略に群臣万歳〕** 趙主の**勒**は大いに群臣を饗し，**徐光**に謂って曰く、

「朕は古より何等の主に方^{くら}べる可きや？」

對えて曰く、

「陛下の神武の謀略は漢の**高**（祖、劉邦）に過ぎ、後世に比べる可き者無し。」

勒は笑いて曰く、

「人は豈に自ら知らざらんや！卿の言は太いに過ぎたり。**朕**が若し漢の**高祖**に遇えば、當に北面して之に事え，**韓**（韓信）、**越**（彭越）と比肩す。若し**光武**に遇えば、當に並びて中原に驅り，未だ鹿の誰の手に死すか知らず。大丈夫は事を行うに，宜しく**礪礪落落**（度量広く細事に拘泥しない）し，日月の皎然たるが如く，終に**曹孟德**、**司馬仲達**が人の孤兒、寡婦を欺き，**狐媚**して以て天下を取るに**效**^ならざる也。」

群臣は皆な頓首して萬歳を稱す。

後趙 **〔石勒は諸生に讀書させる〕** **勒**は學ばずと雖も，好く諸生をして讀書せ使め而して之を聽き，（6-067p）

時に其の意を以て古今の得失を論じ，聞く者は悦び服せざる莫し。嘗て人をして《漢書》を讀ま使め、

酈食其（秦から楚漢戦争期の儒者、説客、10 卷漢高帝三年の見える）が六國の後を立てるを勧めるを聞き，驚いて曰く、

「此の法は當に（天下を）失うべし，何を以て遂に天下を得たるや？」

留侯（史記に留侯伝あり、劉邦軍師の張良）が諫めるを聞くに及び，乃ち曰く、

「（遂に天下を得たるは）此れ有るに頼る耳！」

後趙 ■**郭敬**之退きて樊城を成るや也（前卷五年），晉人は復た襄陽を取る。**夏**，**四月**，**敬**は復た攻めて之を抜き，成を留め而して歸る。

後趙 **〔程遐は石虎の排除進言〕** 趙の右僕射の**程遐**は趙主の**勒**に言つて曰く、

「中山王は勇悍權略にして，群臣は及ぶ莫し。其の志を觀るに，陛下之外より，之を視るひと蔑（視）するが如し。加えるに以て殘賊にして忍に安んじ，久しく將帥と為り，威は外内に振るい，其の諸子は年長じ，皆な兵權を典る。陛下在りせば，自^{おのずか}ら當に它無し，恐らくは少主之臣に非ざる也。宜しく早く之を除くべし，以て便ち大計なり。」

勒は曰く、

「今天下は未だ安からず，大雅は冲幼にして，宜しく強き輔けを得るべし。中山王は骨肉の至親にして，佐命之功有り，方に當に委ねるに**伊**（商の伊尹）、**霍**（漢の霍光）之任を以て，何ぞ卿の言う所の如く至らんや！

卿は正に帝舅之權を**擅**^{ほしいまま}にするを得ざるを恐れる耳。吾は亦た當に卿をも顧命に參じるべし，過ぎて憂うる勿かれ也。」

遐は泣いて曰く：

「臣が慮る所の者は公家なり，陛下は乃ち私計を以て之を拒む，忠言は何に自^より而して入らん乎！中山王は皇太后の養う所と為ると雖も，陛下の天屬に非ず（石虎は勒の從子、勒の父が幼き虎を子としたので、弟と為す），

微功有りと雖も、陛下は其の父子に酬^{むく}い恩榮は亦た足る矣、而るに其の志と願ひ（石虎が天子となる野望）は極まる無し、豈に將來益有る者を乎！若し之を除かざれば、臣は宗廟は血食せざるを見るべし矣。」

勅は聽かず。

後趙 **〔徐光も石勒排除を進言〕** 遐は退き、徐光に告げ、光は曰く、

「中山王は常に吾ら二人に切齒す、恐らくは但だ國を危うきにするに非ず、亦た將に家の禍いと為らん也。」

它日、光は間を承けて勅に言つて曰く、

「今國家は無事にして、而も陛下の神色は怡^{よろこ}ばざる有るが若きは、何ぞ也？」

勅は曰く、

「吳、蜀は未だ平らかず、吾は後世吾を以て受命（天命）之王と為さざるを恐れる也。」

光は曰く、

「魏は漢の運を承け（魏は漢の禪讓を受けて正統たり）、劉備は蜀に興こると雖も、漢は豈亡びずと為すを得る乎！孫權が吳に在るは、猶ほ今之李氏のごとき也。陛下は二都（洛陽・長安）を苞括し、八州を平蕩し、帝王之統は陛下に在らずして、復た當に誰に在るや！且つ陛下は腹心之疾を憂えず、而して更に四支を憂える乎！中山王は陛下の威略に藉^より、向かう所輒ち克ち、而して天下は皆な其の英武は陛下に亞すと言ふ。且つ其の資性は不仁なり、利を見て義を忘れ、父子は並びて權位に據り、勢いは王室を傾ける。而して耿耿^{こうこう}として常に不満之心有り。近くは東宮の侍宴に於いて、皇太子を輕んじる之色有り。臣は恐れるに陛下萬年之後、（6-068p）復た製す可からざらんことを。」

勅は默然とし、始めて太子に命じて尚書の奏事を省可せしめ、且つ中常侍の嚴震を以て可否に參綜せしむ、惟だ征伐斷斬の大事のみは乃ち之を呈せしむ。是に於いて嚴震之權は主相に過ぎ、中山王の虎之門は雀羅（雀を捕る網、誰も来ない）を設ける可し矣。虎は愈々怏怏として悦ばず。

後趙 ■ **〔晉の鄧侃は趙の郭敬を破る〕** 秋、趙の郭敬は南に江西（邾城以東歷陽まで）を掠め、太尉の侃は其の子の平西參軍の斌及び南中郎將の桓宣を遣わして虚に乗りて樊城を攻めしめ、悉く其の衆を俘とする。敬は旋^{かえ}りて樊を救ひ、宣は與に涅水（河南省汝陽道鎮平縣の西北、現・南陽市鎮平縣）に戦ひ、之を破り、皆な其の掠める所を得る。侃の兄の子の臻及び竟陵太守の李陽は新野を攻め、之を抜く。敬は懼れ、遁げ去る。宣は遂に襄陽を抜く。

■ **〔桓宣は襄陽をよく治める〕** 侃は宣をして襄陽に鎮ぜしめ、宣は初めて附くものを招き懷しみ、刑罰を簡にし威儀を、略し、農桑を勸課し、或いは鉏耒（農具）を輶軒（使者の乗る小車）に載せ、親ら民を帥^{うん}いて芸獲^{かく}（草刈り）す。襄陽に在ること十餘年、趙人は再び之を攻めるも、宣は寡弱を以て拒み守り、趙人は勝つ能わず。時の人は以て祖逖、周訪に亞すと為す。

【李壽の台頭】

大成 **〔李壽は寧州を攻める〕** 成の大將軍の壽は寧州を寇す、其の征東將軍の費黑を以て前鋒と為し、廣漢（四川省西川道廣漢縣、現・徳陽市広漢市）に出でしめ、鎮南將軍の任回を越嶲に出でしめ、以て寧州之兵を分ける。

大成 冬、十月、壽、黑は朱提（四川省永寧道宣賓縣の西南、現・宜賓市叙州区）に至り、朱提太守の董炳は城守り、寧州刺史の尹奉、建寧太守の霍彪を遣わして兵を引いて之を助ける。壽は逆^{むか}えて彪を拒まんと欲し、黑は曰く、

「城中は食少なく、宜しく彪を縦^{ゆる}して城に入れ、共に其の穀を消（消費）せしむべし（多人数が籠城する方が早く食料を盡くすの意味）、何為れぞ之を拒むや！」

壽は之に従う。城は久しく下らず、壽は急に之を攻めんと欲す。黒は曰く、

「南中は險阻にして服し難し、當に日月を以て之を制し、其の智勇の俱に困^{くる}しむを待ち、然る後に之を取るべし、潤牢之物（園は厠、園は属なり、豕の居る所、牢もまた犬豕の居る所・城已に囲まれ、犬豕の潤牢の中に居るが如く、その逸出する患なければ、急に改める要なきをいう）は、何んぞ汲汲たるに足らん也。」

壽は従わず、攻め、果たして利あらず、乃ち悉く軍事を以て黒に任ず。

■十一月，壬子（1日）朔，太尉の侃を進めて大將軍と為し、劍を履いて殿に上り、朝に入りて趨せず、贊拜するに名せず。侃は固辭して受けず。

■十二月，庚戌（29日），帝は新宮（五年に造り始める）に遷る。

前涼〔張駿は自立宣言〕是の歲，涼州の僚屬は張駿に勸めて涼王を稱し，秦、涼二州牧を領し，公卿百官を置くこと魏武、晉文の故事の如くせしむ。駿は曰く、

「此れ人臣の宣言する所に非ざる也。敢えて此を言う者は，罪は赦さず！」

然るに境内は皆な之を稱して王と為す。駿は次子の重華を立てて世子と為す。（6-069p）

顯宗成皇帝中之上鹹和八年（癸巳，333年）

大成■〔李壽は朱提を抜く〕春，正月，成の大將軍の李壽は朱提を抜き，董炳、霍彪は皆な降り，壽の威は南中に震う。

■後趙〔晉は趙の修好拒否〕丙子（26日），趙主の勒は遣使して來たりて修好す。詔して其の幣を焚く（晉は未だ君父の讐を復する能わずと雖も、幣を焚くの一事は猶ほ忠臣義士の氣を舒ぶるに足る）。

大成〔李壽は寧州を制圧〕三月，寧州刺史の尹奉は成に降り，成は盡く南中之地を有し，大赦し，大將軍の壽を以て寧州を領せしむ。

▲〔慕容廆は卒し、慕容皝は繼ぐ〕夏，五月，甲寅（6日），遼東の武宣公の慕容廆は卒す。六月，世子の皝（字は元眞、廆の第三子）は平北將軍を以て平州刺史を行い，部内を督攝す。系囚を赦す。長史の裴開を以て軍諮祭酒と為し，郎中令の高詡を玄菟太守と為す。皝は帶方太守の王誕を以て左長史と為し，誕は遼東太守の陽鶩を以て才と為し而して之に讓る。皝は之に従い，誕を以て右長史と為す。

【石勒死後、石虎の篡奪と混乱】

後趙〔石勒病発し、石虎不穏な動き〕趙主の勒は疾に寝ね，中山王の虎は入りて禁中に侍し，詔を矯めて，群臣親戚は皆な入るを得ず。疾之増損は，外に知る者無し。又た詔を矯めて秦王の宏（中外諸軍事を都督、鄴に鎮す）、彭城王の堪（河南に鎮す）を召し襄國に還らしむ。勒の疾は小しく廖え，宏を見て，驚いて曰く、「吾は王をして藩鎮に處ら使むは，正に今日に備えるなり，王を召したる者有り邪，將^はたまた自ら來たる邪？召す者有れば，當に按じて之を誅すべし！」

虎は懼れて曰く、

「秦王は思慕し，暫らく還る耳，今之を遣るべし。」

仍は留めて遣らず。數日して，復た之を問い，虎は曰く、

「詔を受けて即ち遣れり，今は已に半道なり矣。」

廣阿（県、直隸省大名道隆平県の東、現・邢台市隆堯県）に蝗有り、**虎**は密かに其の子の冀州刺史の**邃**をして騎三千を帥いて蝗の所に游ば使む。（石勒の死を見越して、遊軍と為すつもり）

後趙 **〔石勒死して石虎は弘を脅迫〕** **秋，七月，** **勒**の疾いは篤く、遺命して曰く、

「**大雅**（石弘の字）兄弟は、宜しく善く相い保つべし、**司馬氏**は、汝曹之前車（前車が覆れば後車も覆る、兄弟相損なうを戒める）也。**中山王**は宜しく深く**周**（周公）、**霍**（霍光）を思い、將來の口實と為す勿かれ。」

戊辰（21日）、**勒**（歳60）は卒す。**中山王**の**虎**は太子の**弘**（石勒の第二子）を劫し軒に臨ませ、右光祿大夫の**程遐**、中書令の**徐光**を収め、廷尉に下し、**邃**を召し兵を將いて入りて宿衛せしめ、文武は皆な奔り散ず。

弘は大いに懼れ、自ら劣弱を陳べ、位を**虎**に譲る。**虎**は曰く、

「君終わりにて、太子の立つは、禮之常也。」

弘は涕泣して固く譲り、**虎**は怒りて曰く、

「若し重任に堪えざれば、天下は自ら大義有り、何ぞ豫め論ずるに足らん！」

弘は乃ち即位す。大赦す。**程遐**、**徐光**を殺す。夜、**勒**の喪を以て潜かに山谷に瘞める、其の處を知る莫し。己卯（32日？）、儀衛を備え、虚しく高平陵に葬し、諡して**明帝**と曰い、廟號を**高祖**とす。

■ **〔石聰は晉に着けず誅殺さる〕** 趙將の**石聰**及び譙郡太守の**彭彪**は、各々遣使して來降す。**聰**は本は晉人にして、姓は**石氏**を冒す。（6-070p）朝廷は督護の**喬球**を遣わして兵を將いて之を救わしめ、未だ至らず、**聰**等は**虎**の誅する所と為る。

▲ **慕容皝**は長史の勃海王の**濟**等を遣わして來たりて喪を告げる。

後趙 **〔石虎は魏王として実質篡奪〕** **八月，** 趙主の**弘**は**中山王**の**虎**を以て丞相、魏王、大單于と為し、九錫を加え、魏郡等十三郡を以て國と為し、百揆を總攝せしむ。**虎**は其の境内に赦し、妻の**鄭氏**を立てて**魏王**后と為す。子の**邃**を魏の太子と為し、使持節、侍中、都督中外諸軍事、大將軍を加え、尚書事を録せしむ。次子の**宣**を使持節、車騎大將軍、冀州刺史と為し、河間王に封じる。**韜**を前鋒將軍、司隸校尉と為し、樂安王に封じる。**遵**を齊王に封じ、**鑒**を代王に封じ、**苞**を樂平王に封じる。平原王の**斌**を徙して章武王と為す。**勒**の文武の舊臣は、皆な散任（冗散な官職）に補す。**虎**之府寮親黨は、悉く台省の要職に署す。鎮軍將軍の**夔安**を以て左僕射を領せしめ、尚書の**郭殷**を右僕射と為す。更めて太子の宮を命けて崇訓宮と曰い、太后の**劉氏**以下は皆な徙りて之に居す。**勒**の宮人及び車馬、服玩之美なる者を選んで、皆な丞相府に入れる。

宇文 ▲ **宇文**の**乞得歸**は其の東部大人の**逸豆歸**の逐う所と為り、走りて外に死す。**慕容皝**は兵を引いて之を討ち、廣安（棘城の北）に軍す。**逸豆歸**は懼れ而して和を請い、遂に榆陰、安晉（共に翁牛特部内、現・翁牛特旗）の二城を築き而して還る。

大成 成の建寧、牂柯の二郡は來降し、**李壽**は復た撃ちて之を取る。

後趙 **〔劉太后と堪の反乱と誅殺〕** 趙の**劉太后**は**彭城王**の**堪**に謂って曰く、

「**先帝**は甫めて晏駕し、丞相は**邃**に相い陵籍（陵駕踏籍）すること此くの如し。帝祚之亡びんは、殆んど復た久しからず。王は將に之を若何せんや？」

堪は曰く、

「**先帝**の舊臣は、皆な疏斥せ被れ、軍旅は復た人に由らず（石虎の諸子は皆兵權を握る）、宮省之内には、為す可き者無し（宿衛台省の要職は全て石虎の息がかかり匡正を謀る者無し）。臣は請うに兗州に奔り、南陽王の**恢**（**勒**の少子、廩丘に鎮す）を挾みて盟主と為し、廩丘（山東省東臨道范県、現・濮陽市范県）に據り、**太后**の詔を牧、守、征、鎮に宣し、各々をして兵を擧げて以て暴逆を誅せ使めん、庶幾わくは猶ほ濟す有らん也。」

劉氏は曰く、

「事は急なり矣！當に速かに之を為すべし。」

九月，堪は微服し、輕騎にて兗州を襲い、克たず、南に譙城に奔る。丞相の虎は其の將の郭太を遣わして之を追ひ、堪を城父に獲り、襄國に送り、炙りて之を殺す。南陽王の恢を征して襄國に還らしむ。劉氏の謀は洩れ、虎は廢し而して之を殺し、弘の母の程氏を尊びて皇太后と為す。堪は本は田氏の子、數々功有り、趙主の勒は養いて以て子と為す。劉氏は膽略有り、勒は毎に之と軍事を參決し、勒を佐けて功業を建て、呂后之風有り、而も妬忌せず更に之に過ぐ。

後趙 [石生・石朗は反乱、蒲洪は前涼に付く] 趙の河東王の生は關中に鎮し、石朗は洛陽に鎮す。(劉胤が西に去り、石生は洛陽より長安を取り、石朗は洛陽に鎮す) ■冬，十月，生、朗は皆な兵を擧げて以て丞相の虎を討つ。生は自ら秦州刺史を稱し、遣使して來降す。

前涼 氐帥の蒲洪 (咸和四年に虎に降る) は自ら雍州刺史を稱し、西に張駿に附く。

後趙 [石虎は鮮卑の通牒で石生・石朗を撃破] 虎は太子の邃を留めて襄國を守らしめ、歩騎七萬を將いて朗を金墉に攻める。(6-071p) 金墉は潰え、朗を獲り、^{あしき} 刑り而して之を斬る。進みて長安に向かい、梁王の挺 (虎の子) を以て前鋒大都督と為す。生は將軍の郭權を遣わして鮮卑の涉瑰の衆二萬を帥いて前鋒と為し以て之を拒ましめ、生は大軍を將いて繼いで發し、蒲阪に軍す。權は挺と潼關に戦い、大いに之を破り、挺及び丞相の左長史の劉隗 (晉より趙に奔る者、字は大連、273年 - 333年、前漢の楚元王劉交の末裔と伝わり、魏の樂浪太守の劉茂の末裔、父は西晉の東光県令の劉砥) は皆な死し、虎は還りて澠池に奔り、屍は三百餘里に枕す。鮮卑は潜かに虎と通謀し、反りて生を撃つ。生は挺の已に死すを知らず、懼れ、單騎にして長安に奔る。權は餘衆を收め、退きて渭汭に屯す。生は遂に長安を棄て、雞頭山 (甘肅省涇原道平涼県の西、現・平涼市崆峒区) に匿れる。將軍の蔣英は長安に據りて拒み守り、虎は兵を進めて英を撃ち、之を斬る。生の麾下は生を斬りて以て降る。權は隴右に奔る。

後趙 [蒲洪は石虎に降り優遇、枋頭に移る、姚弋仲を清河に移す] 虎は分かちて諸將に命じて汧、隴に屯ぜしめ、將軍の麻秋を遣わして蒲洪を討つ。洪は戸二萬を帥いて虎に降り、虎は迎えて洪を拜して光烈將軍 (石虎が初めて置く)、護氏校尉とす。洪は長安に至り、虎に關中の豪傑及び氐、羌を徙して以て東方を實するを説き、曰く、

「諸氐は皆な洪の家の部曲なり、洪が帥いて以て從えば、誰か敢えて違ふ者あらん！」

虎は之に従い、秦、雍の民及び氐、羌の十餘萬戸を關東に徙す。洪を以て龍驤將軍、流民都督と為し、枋頭 (河南省河北道濬県、現・安陽市鶴壁市浚県) に居ら使む。羌帥の姚弋仲を以て奮武將軍、西羌大都督と為し、其の衆數萬を帥いて徙して清河之灡頭 (直隸省大名道襄強県の東北、現・衡水市棗強県) に居ら使む。

後趙 [曹操の如く魏台を建て] 虎は襄國に還り、大赦す。趙主の弘は虎に命じて魏台を建て、一に魏の武王の漢を輔ける故事の如し。

【慕容皝立つも、慕容仁等と対立深刻】

▲ [慕容皝は位を継ぎ、嚴峻] 慕容皝は初めて位を嗣ぎ、法を用いるに嚴峻なり、國人は多く自ら安ぜず、主簿の皇甫真は切諫す、聽かず。

▲ [慕容翰は段遼に奔る] 皝の庶兄の建威將軍の翰、母の弟の征虜將軍の仁は、勇略有り、屢々戦功を立て、士心を得、季弟 (最年少の弟) の昭は、才藝有り。皆な魔に寵有り。皝は之を忌み、翰は歎じて曰く、
「吾は事を先公より受け、敢えて力を盡くさざればあらず、幸にも先公之靈に頼り、向う所功有り、此れ

乃ち天吾が國を贊けるなり、人の力に非らざる也。而るに人は吾之辦ずる所となると謂う、以て雄才は制し難しと為し、吾は豈に坐し而して禍いを待つ可き邪！」

乃ち其の子と出でて段氏に奔る。段遼は素より其の才を聞き、^{こいねが}冀いて其の用を收め、甚だ之を愛重す。

▲〔平郭で慕容仁挙兵〕仁は平郭（奉天省遼瀋道蓋平県、現・營口市蓋州市）より來たりて喪に奔り、昭に謂って曰く、

「吾等は素より驕り、多く嗣君に禮無く、嗣君は剛嚴にして、罪無くとも猶ほ畏る可し、況んや罪有るを乎！」

昭は曰く、

「吾が輩は皆な正嫡（正室の子）を體し、國に於いて分（分を取る權利）有り。兄は素より士心を得、我は内に在りて未だ疑う所と為らず、其の間隙を伺えば、之を除くは難からず。兄は趣かに舉兵して以て來たれば、我は内應を為さん、事成る之日は、我に遼東を與えよ。男子事を舉げれば、克たざれば則ち死し、建威に效いて生を異域の地に偷む能わず。」

仁は曰く、

「善し！」

遂に平郭に還る。閏月（元嘉曆十一月）、仁は舉兵して而して西す。（6-072p）

▲〔事露見し討伐軍を仁は破り、修壽は仁に降る〕或るひとは仁、昭之謀を以て魼に告げ、魼は未だ之を信じず、遣使して按驗せしむ。仁の兵は已に黃水（潢水、大遼河）に至り、事の露わるを知り、使者を殺し、還りて平郭に據る。魼は昭に死を賜り、軍祭酒の封弈を遣わして遼東を慰撫し、高詡を以て廣武將軍と為し、兵五千を將いて庶弟の建武將軍の幼、稚、廣威將軍の軍、寧遠將軍の汗、司馬の遼東の修壽（289-357、安岳3号墳の壁画で有名）と共に仁を討たしむ。仁と汶城（奉天省遼瀋道旧新民府内、現・瀋陽市新民市）の北に戦い、魼の兵は大いに敗れ、幼、稚、軍は皆な仁の獲る所と為る。壽は嘗て仁の司馬為り、遂に仁に降る。前の大農の孫機等は遼東城（襄平）を舉げて以て仁に應じる。封弈は入るを得ず、汗と俱に還る。東夷校尉の封抽、護軍の平原の乙逸、遼東相の太原の韓矯は皆な城を棄てて走り、是に於いて仁は盡く遼東之地を有す。段遼及び鮮卑の諸部は皆な仁と遙かに相い應援す。魼は皇甫真之言を追思し、真を以て平州の別駕（魼は平州刺史を領し、真を別駕と為す）と為す。

■十二月（元嘉曆一月）、郭權は上邽に據り、遣使して來降す。京兆、新平、扶風、馮翊、北地は皆な之に應ず。

前涼 〔張駿と大成の李雄の駆け引き〕初め、張駿は道を成に假りて以て表を建康に通じるを欲し、成主の雄は許さず。駿は乃ち治中從事の張淳を遣わして成に稱籙して以て道を假りんと欲す。雄は偽りて之を許し、將に盜をして諸を東峽（瞿塘峽・巫峽・西陵峽の三峽は成都の東にあり）に覆えさんとせ使む。蜀人の橋贊は密かに淳に以て告げ、淳は雄に謂って曰く、

「寡君は小臣をして無跡之地（涼人の跡無きの地）を行き、萬里に誠を建康に通じせ使むる者は、陛下が忠義を嘉尚し、能く人之美を成すを以ての故也。若し臣を殺さんと欲する者ならば、當に之を都市に斬り、衆目に宣示して曰う、『涼州は舊德を忘れず、使いを琅邪（江左の晉室は琅邪より出る）に通じ、主聖に臣明らかにして、發覺して之を殺すべし。』此くの如くすれば、則ち義聲は遠く播き、天下は威を畏れん。今盜をして之を江中に殺さ使めば、威刑は顯われず、何んぞ以て天下に示すに足らん乎！」

雄は大いに驚いて曰く、

「安んぞ此有らん邪！」

大成 **〔涼の使者張淳は李雄を説いて建康に到達〕** 司隸校尉（蜀が成都に置く）の**景騫**は**雄**に言って曰く、
「**張淳**は壯士なり、之を留めるを請う。」

雄は曰く、

「壯士は安んぞ肯えて留まるや！且くしばらく こころみ **試**に卿の意を以て之を觀よ。」

騫は**淳**に謂って曰く、

「卿は體は豐大（肥大）にして、天熱し、且くしばらく下吏を遣わし、小しくとど住まりて涼を須つ可し。」

淳は曰く、

「寡君は皇輿は播越（懷帝愍帝は蒙塵し卒に害せられ）し、梓宮は未だ返らず、生民は塗炭し、之を振救する莫きを以て、故に**淳**を遣わして誠を上都（建康）に通ぜしむ。論ずる所の事は重く、下吏の能く傳える所に非ず。下吏をして了す可から使めば、則ち**淳**も亦た來たらず矣。火山湯海すると雖も、猶ほ將に之に赴かんとす、豈に寒暑之憚るに足るを哉！」

雄は**淳**に謂って曰く、

「**貴主**は英名にして世をおお蓋い、土險に兵強く、何の亦た**帝**を稱して自ら一方にたの娛しまざるや？」

淳は曰く、(6-073p)

「寡君は祖考以來、世々忠貞に篤く、仇恥の未だ雪がすすざるを以て、戈を枕（安心して眠れない）として旦を待つ、何の自ら娛しむこと之れ有らん！」

雄は甚だ慚じて、曰く、

「我之祖考も本より亦た晉臣にして、天下の大亂に遭い、六郡之民と此の州に避難し（82 卷惠帝元康八年にあり）、衆の推す所と為り、遂に今日有り。琅邪が若し能く大晉を中國に中興する者ならば、亦た（吾も）當に衆を帥いて之を輔けん。」

厚く**淳**に禮を為し而して之を遣る。**淳**は卒に（君の）命を建康に致す。

前涼 **〔晉と涼の通行成功〕** 長安之守りを失う也（89 卷愍帝建興四年）、敦煌の（遣わす）計吏の**耿訪**は漢中より江東に入り、屢々上書して大使を遣わして涼州を慰撫するを請う。朝廷は**訪**を以て侍書御史に守たらしめ、**張駿**を拜して鎮西大將軍とし、隴西の**賈陵**等十二人を選びて之に配す。**訪**は梁州に至るも、道は通じず、詔書を以て**賈陵**に付け、詐りて賈客と為りて以て之を達す。是の歲、**陵**は始めて涼州に至り、**駿**は部曲督王の**豐**等を遣わして報謝す。

顯宗成皇帝中之上鹹和九年（甲午，334年）

後趙 **春，正月**（元嘉曆二月）、趙は改元して延熙とす。

■詔して**郭權**を以て鎮西將軍、雍州刺史と為す。

仇池 ■ **〔仇池楊毅は晉に稱藩〕** 仇池王の**楊難敵**は卒し、子の**毅**は立つ、自ら龍驤將軍、左賢王、下辦公と稱す。叔父の**堅頭**之子の**盤**を以て冠軍將軍、右賢王、河池公と為し、遣使して來たりて稱藩す。

■**前涼** **〔前涼は晉に毎年朝貢〕** **二月**（元嘉曆二月閏月）、丁卯（23日）、詔して**耿訪**、**王豐**を遣わして印綬を繼いで**張駿**に大將軍、都督陝西、雍、秦、涼州諸軍事を授ける。是より毎歲使者は絶えず。（仇池稱藩で道が通じる）

【慕容翰は国を滅ぼせず】

▲慕容仁は司馬の翟楷を以て東夷校尉を領せしめ、前平州別駕の龐鑒をして遼東相を領せしむ。

段氏▲**〔段遼・慕容翰は柳城襲撃し激戦〕**段遼は兵を遣わして徒河を襲うも、克たず。復た其の弟の蘭を遣わし慕容翰と共に柳城（熱河特別区域凌源県、現・朝陽市）を攻め、柳城都尉の石琮、城大（城主）の慕輿泥は力を併せて拒み守り、蘭等は克たず而して退く。遼は怒り、蘭等を切責し、必ず之を抜か令む。休息すること二旬にして、復た兵を益して來攻す。士は皆な袍を重ね楯を蒙り、飛梯（雲梯）を作り、四面俱に進み、晝夜息まず。琮、泥は拒み守ること彌々固く、殺傷すること千餘人、卒に抜く能わず。慕容皝は慕容汗及び司馬の封弈等を遣わして共に之を救わしむ。皝は汗を戒めて曰く、

「賊の氣は鋭なり、與に鋒を爭う勿かれ！」

汗の性は驍果にして、千餘騎を以て前鋒と為し、直ちに進む。封弈は之を止めるも、汗は従わず。蘭と牛尾谷（柳城の北）に遇い、汗の兵は大いに敗れ、死者は太半なり。弈は陳を整えて力戦し、故に（汗の兵は）沒せざるを得たり。

段氏▲**〔慕容翰は国滅ぼすを恐れ攻撃抑制〕**蘭は勝ちに乗りて窮追せんと欲し、慕容翰は遂に其の國を滅ぼさんとするを恐れ、之を止めて曰く、

「夫れ將と為りては、當に務めて慎重にすべし、己を審かにし敵を量り、萬全に非ざれば動く可からず。今其の偏師を挫くと雖も、未だ其の大勢を屈する能わず。皝は權詐多く、好みて潜伏を為し、（6-074p）若し國中之衆を悉くし自ら將いて以て我を拒めば、我は縣軍深く入り、衆寡は敵せず、此くは危うき道也。且つ命を受ける之日、正に此の捷を求めるのみ。若し命に違ひて貪り進みて、萬一にも敗を取れば、功名は俱に喪い、何を以て返りて面ぜん！」

蘭は曰く、

「此れ已に擒と成らんとし（慕容皝が擒になる直前の意味）、餘る理は有る無し、卿は正に遂に卿の國を滅ぼすを慮る耳！今千年は東に在り、若し進み而して志を得れば、吾は將に之を迎えて以て國嗣と為し、終に卿に負き、宗廟をして祀られざら使めざる也。」

千年と者、慕容仁の小字也。翰は曰く、

「吾は身を投じて相い依り、復た還る理無し。國之存亡は、我に於いて何か有らん！但だ大國之計を為さんと欲し、且つ相い為に功名を惜しむ耳。」

乃ち所部に命じて獨り還らんと欲す、蘭は已むを得ず而して之に従う。

大成三月、成主の雄は寧州を分けて交州（興古・永昌・牂柯・越雋・夜郎）を置き、霍彪を以て寧州刺史と為し、爨深を交州刺史と為す。

後趙〔上邽の豪族は權を殺し趙に投降、郭敖誅殺〕趙の丞相の虎は其の將の郭敖及び章武王の斌を遣わして、步騎四萬を帥いて西に郭權を撃ち、華陰に軍す。夏、四月、上邽の豪族は權を殺し以て降る。虎は秦州の三萬餘戸を青、並二州に徙す。長安人の陳良夫は黑羌に奔り、北羌王の薄句大等と北地、馮翊を侵擾す。章武王の斌、樂安王の韜は合い撃ちて、之を破り、句大は馬蘭山に奔る。郭敖は勝ちに乗りて北に逐い、羌の敗る所と為り、死者は什に七八。斌等は軍を収めて三城（山西省雁門道代県、現・忻州市代県）に還る。虎は遣使して郭敖を誅す。秦王の宏は怨言（父病む時に詔を矯めて召し職を失う）有り、虎は之を幽す。

▲〔慕容仁は平州刺史、遼東公を自称〕慕容仁は自ら平州刺史、遼東公と稱す。

■ 【陶侃は清廉に引退死去】 長沙の桓公の陶侃は、晩年は深く満盈(盛り詰める)を以て自ら懼れ、朝權に預らず、屢々老を告げて國(長沙)に歸らんと欲し、佐吏等は苦^{ねんご}ろに之を留める。六月、侃の疾は篤く、上表して位を遜^{へりくだ}る。左長史の殷羨を遣わして假る所の節麾(三軍の指揮棒)、幢(幡幢)、曲蓋(曲柄の蓋)、侍中の貂蟬、太尉の章(印章)、荊、江、雍、梁、交、廣、益、寧八州刺史の印傳、檠戟を奉送す。軍資、器仗、牛馬、舟船は、皆な定薄有り、倉庫を封印し、侃は自ら管鑰を加える。後事を以て右司馬の王愨期に付し、督護を加え文武を統領せしむ。甲寅(12日)、輿車は、臨津に出で船に就き、將に長沙に歸らんとし、顧みて愨期に謂って曰く、

「老子(侃自ら)が婆娑(肢体緩縦にして収まらざる貌)たるは、正に諸君に坐す！」(早く退かずに困乏することかくあるは参佐が懇ろに留めたるに因るの意味)

乙卯(13日)、樊谿(武昌の西三里)に薨ず。(6-075p)侃は軍に在ること四十一年(惠帝の太安二年に張昌を撃つより)、明毅にして善く斷じ、識察は纖密にして、人は欺く能わず。南陵(安徽省蕪湖道喜池県の西南、現・池州市貴池区)より白帝に迄るまで、數千里中は、路は遺ちるを拾わず。薨ずるに及び、尚書の梅陶は親しむ人の曹識に書を與えて曰く、

「陶公は機神明鑒なるは魏武に似て、忠順勤勞は孔明に似、陸抗諸人は及ぶ能わざる也。」

謝安は毎に言う、

「陶公は法を用いると雖も、而も恆に法外の意を得る。」

安は、鯢之從子也。

【大成の李雄卒し、混乱へ】

大成 【成主李雄卒し李壽実権掌握】 成主の雄は瘍(腫瘍)を頭に生ず。身は素より多く金創(金属による傷)あり、病に及び、舊痕は皆な膿潰し、諸子は皆な惡みて而して之を遠ざける。獨り太子の班(字は世文、雄の兄蕩の子)は晝夜侍側し、衣冠を脱がず、親ら為に膿を吮^{すう}う。雄は大將軍の建寧王の壽を召いて遺詔を受けて政を輔けしむ。丁卯(25日)、雄は卒し(年61)、太子の班は即位す。建寧王の壽を以て尚書事を録せしめ、政事は皆な壽及び司徒の何點、尚書令の王琬に委ね、班は居中に居りて喪禮を行い、一に預る所無し。

■ 【庾亮が朝廷掌握】 辛未(29日)、平西將軍の庾亮に征西將軍、假節、都督江、荊、豫、益、梁、雍六州諸軍事を加え、江、豫、荊三州刺史を領せしめ、武昌に鎮ぜしむ。亮は殷浩を辟して記室參軍と為す。浩は、羨之子也、豫章太守の褚裒、丹楊丞の杜乂と與に、皆な識度は清遠にして、善く《老》、《易》(老子易經)を談ずるを以て、名を江東に擅^{はしいまま}にし、而して浩は尤も風流に宗とする所と為る。裒は、略(77卷魏元帝景元元年にあり)之孫、乂は、錫(83卷惠帝元康九年にあり)之子也。桓彝は嘗て裒に謂って曰く、

「季野(褚裒の字)は皮裡《春秋》有り。」

其の外には臧否無けれども而して内に褒貶有るを言う也。謝安は曰く、

「裒は言わずと雖も、而も四時之氣は亦た備えり矣。」

■ **▲秋、八月**、王濟は遼東に還り、詔して侍御史の王齊を遣わして遼東公の魔を祭らしめ、又た謁者の徐孟を遣わして慕容皝を鎮軍大將軍、平州刺史、大單于、遼東公に策拜して、節を持し、都督し、製を承けて封拜し、一に魔の故事の如しと。船は馬石津(場所不明)に下り、皆な慕容仁の留める所と為る。

■ **九月**、戊寅(8日)、衛將軍の江陵の穆公の陸曄は卒す。

大成 【李越は李班を殺害】 成主の雄之子の車騎將軍の越は江陽に屯し、喪に奔りて成都に至る。太子の

班が雄の生む所に非ざるを以て、意は服せず、其の弟の安東將軍の期（字は世運、雄の第四子）と亂を作るを謀る。班の弟の^じ玠は班に勸めて越を遣りて江陽に還し、期を以て梁州刺史と為し、^{かぼう}葭萌（四川省嘉陵道昭化県の東南、現・广元市元壩区）に鎮ぜしむ。班は未だ葬せざるを以て、遣るに忍びず、心を推して之を待ち、疑間する所無く、玠を遣わして出でて涪に屯ぜしむ。冬，十月，癸亥（23日）朔（元嘉曆朔は辛丑），越は班が夜哭するに因りて、之を殯宮に於いて弑し、並びに班の兄の領軍將軍の都を殺す；太后の任氏の令を矯めて、班を罪狀し而して之を廢す。

大成 **[令名ある李期が即位]** 初め、期の母の冉氏は賤しく、(6-075p) 任氏は母として之を養う。期は才藝多く、令名有り。班の死するに及び、衆は越を立てんと欲し、越は期を奉じ而して之を立てる。甲子（24日）、期は皇帝に即位す。班に謚して戾太子と曰う。越を以て相國と為し、建寧王に封じ、大將軍の壽に大都督を加え、徙して漢王に封じる。皆な尚書事を錄せしむ。兄の霸を以て中領軍、鎮南大將軍と為す。弟の保を鎮西大將軍、汝山太守と為す。從兄の始（晉書載記によれば、始は李特の長子にして、期の伯父、壽の從兄）を征東大將軍と為し、越に代わりて江陽に鎮ぜしむ。丙寅（26日）、雄を安都陵に葬し、謚して武皇帝と曰い、廟號を太宗とする。

大成 **[大成の一族の内乱頻発し不安定に]** 始は壽と共に期を攻めんと欲し、壽は敢えて發せず。始は怒り、反りて壽を期に譖り、之を殺さんと請う。期は壽に籍りて以て李玠を討たんと欲し、故に許さず、壽を遣わして兵を將いて涪に向かわしむ。壽は先ず遣使して玠に告げて去就の利害を以て、其の去る路を開き、■玠は遂に（晉に）來奔す。詔して玠を以て巴郡太守と為す。期は壽を以て梁州刺史と為し、涪に屯ぜしむ。

後趙 **[石弘は廢され、石虎は趙天王と称す]** 趙主の弘は自ら璽綬を^{もたら}齎して魏宮（石虎は魏王）に詣り、位を丞相の虎に禪るを請う。虎は曰く、

「帝王は大業なり、天下は^{おのずか}自ら當に議有り、何為れぞ自ら此を論ぜん邪！」

弘は流涕して宮に還り、太后の程氏に謂って曰く、

「先帝の種は真に復た遣る無し矣！」

是に於いて（趙の）尚書は魏台に奏す、

「唐、虞（中国伝説上聖天子で陶唐氏堯と有虞氏舜）の禪讓の故事に依るを請う。」

虎は曰く、

「弘は愚闇にして、喪に居りて禮無く、以て萬國に君す可からず、便ち當に之を廢すべし、何の禪讓を也！」

十一月，虎は郭殷を遣わして節を持ちて宮に入らしめ、弘を廢して海陽王と為す。弘は安歩して車に就き、容色は自若たり、群臣に謂って曰く、

「庸昧にして大統を纂承するに堪えず、夫れ復た何をか言わん！」

群臣は流涕せざる莫く、宮人は慟哭す。群臣は魏台に詣りて勸進す、虎は曰く、

「皇帝者盛德之號なり、敢えて當る所に非ず、^{しばら}且く居攝趙天王と稱す可し。」

弘（年21）及び太后の程氏、秦王の宏、南陽王の恢を崇訓宮（太子の宮を改名）に幽し、尋いで皆な之を殺す。

後趙 **[姚弋仲は石虎に直言し許される]** 西羌の大都督の姚弋仲は疾を稱して駕せず、虎は屢々之を召し、乃ち至る。正色して虎に謂って曰く、

「弋仲は常に^{おも}謂うに大王は命世（一世に秀でる）の英雄なり、奈何して臂を把り托を受け而して返りて之を

奪う邪？」

虎は曰く、

「吾は豈に此を楽しまん哉！顧みるに海陽は年少く、恐らくは家事を了す能わず、故に之に代わる耳。」
(石虎の) 心は平らかならずと雖も、然るに其の誠實を察して、亦た之を罪せず。

後趙 **〔石虎の政治体制〕** 虎は**夔安**を以て侍中、太尉、守尚書令と為し、**郭殷**を司空と為し、**韓晞**を尚書左僕射と為し、魏郡の**申鍾**を侍中と為し、**郎闔**を光祿大夫と為し、**王波**を中書令と為す。(6-077p) 文武の封拜は各々差有り。虎は行きて信都に如き、復た襄國に還る。(載記に曰く、虎は籤文に「天子當に東北より来たるべし」とあるので、法駕を備えて信都に行き、還り以てこれに応じる。慕容氏が中国に入るを謂う。昔秦の始皇帝は東遊して天子の氣を厭すれども、漢の高祖の興るを阻止出来ず。)

▲ **〔慕容皝は遼東を討つ〕** 慕容皝は遼東を討ち、甲申（15日）、襄平に至る。遼東人の**王岌**は密かに信して降るを請う。師は進みて、入城し、**翟楷**、**龐鑒**は單騎にして走り、居就（奉天省遼瀋道遼陽県の西南、現・遼陽市遼陽県）、**新昌**（奉天省遼瀋道海城県の東、現・鞍山市海城市）等の縣は皆な降る。皝は悉く遼東民を坑せんと欲す、**高詡**は諫めて曰く、

「遼東之叛くは、實に本圖に非ず、直に**仁**の凶威を畏れ、従わざるを得ず。今元惡（慕容仁）は猶ほ存す、始めて此の城に克ち、遽に夷滅を加えれば、則ち未だ下らざる之城は、善に歸するの之路無し矣。」
皝は乃ち止む。遼東の大姓を棘城に分けて徙す。**杜群**を以て遼東相と為し、遺民を安輯せしむ。

後趙 **十二月**、趙の徐州從事の**蘭陵**の**朱縱**は刺史の**郭祥**を斬り、彭城を以て來降し、趙將の**王朗**は之を攻め、縱は淮南に奔る。

▲ **〔慕容仁は新昌を襲う〕** 慕容仁は兵を遣わして新昌を襲い、督護の新興の**王寓**は撃ちて之を走らせ、遂に新昌（の官吏民衆）を徙して襄平に入る。

顯宗成皇帝中之上鹹康元年（乙未、335年）

■ **春、正月**、庚午（2日）朔（元嘉曆朔は己巳）、帝は元服を加える。大赦し、改元す。

大成 **後趙** 成、趙は皆な大赦し、成は改元して玉恆とし、趙は改元して建武とす。

大成 成主の**期**は皇后の**閭氏**を立て、衛將軍の**尹奉**を以て右丞相、驃騎將軍と為し、尚書令の**王琬**を司徒と為す。

後趙 **〔石虎の建築趣味〕** 趙王の虎は太子の**邃**に命じて尚書の奏事を省可せしめ、唯だ郊廟を祀り、牧守を選び、征伐、刑殺は乃ち之を親らず。虎は好く宮室を治め、鶴雀台（鄴の、魏の武帝が作る銅雀台）の崩れるや、典匠少府（漢の將作大匠）の**任汪**を殺す。復た之を修め使め、其の舊に倍す。**邃**の保母の**劉芝**は宜城君に封じられ、朝權に關預し、賄賂を受納し、仕え進めるを求める者多く其の門に出ず。

▲ 慕容皝は左、右の司馬を置き、司馬の**韓矯**、軍祭酒の**封弈**を以て之と為す。

【王導の羸疾】

■ **〔王導は孔坦を左遷〕** 司徒の導は羸疾を以て、朝會に堪えず、**三月**、乙酉（17日）、帝は其の府に幸し、群臣と内室に於いて宴し、導を拜して并せて其の妻の**曹氏**を拜せんとす。侍中の**孔坦**は密かに表して切諫し、以て為す、

「帝は初めて元服を加える、動くに宜しく禮を顧みるべし」

帝は之に従う。坦は又た帝の政を導に委ねるを以て、從容として言つて曰く、

「陛下の春秋は已に長じ、聖敬は日々に躋る（のぼる）（進む）、宜しく博く朝臣を納れ、善道を諮諏（たずねて意見を求める）すべし。」

導は聞き而して之を惡み、坦を出して廷尉と為し。坦は意を得ず、疾を以て職を去る。

■ 〔王導は桓景を親愛す〕 丹楊尹の桓景は、人と為りは諂巧（てんこう）にして、導は之を親愛す。會々熒惑は南斗（晉書天門志に南斗の六星は天廟なり、丞相太宰の位なりと）を守りて旬を経て、導は領軍將軍の陶回（たうかい）に謂つて曰く、

「門は、揚州之分なり（天門志にあり）、吾は當に位を遜りて以て天譴（てんけん）を厭（きら）すべし。」

回は曰く、

「公は明德を以て輔（たす）と作り、而して桓景（けんけい）を與（とも）して膝（ひざ）に造らしむ（接近する）、熒惑をして何を以てか退捨せ使めんや！」

導は深く之を愧じる。（6-078p）

■ 〔王濛と王述、劉惔の親交〕 導は太原の王濛（もう）（309-347、東晋の外戚、哀帝の皇后王穆之の父、字は仲祖。本貫は太原郡晋陽縣）を辟して掾と為し、王述を中兵屬と為す。述は、昶（しやう）（魏に仕えて荊州に鎮し功名あり）之曾孫也。濛は小廉を修めず、而も清約を以て稱せ見れ、沛國の劉惔（りゅうてん）と名を齊しく、友善す。惔は常に稱す、

「濛の性は至通に而して自然に節有り。」

濛は曰く、

「劉君が我を知ること、我が自ら知るに勝れり。」

當時風流を稱する者は、惔、濛を以て首と為す。述の性は沈靜にして、坐客の辯論蜂起する毎に、而も述は之に處りて恬如たる也。年は三十、尚ほ未だ名を知られず、人は之を癡と謂う。導は門地（世々高名ある家柄）を以て之を辟す。既に見て、唯だ江東（王述は東午り建康に入る）の米價をのみ問う、述は目を張りて答えず。導は曰く、

「王掾は癡にあらず、人は何ぞ癡と言う也！」

嘗て導に見え發言する毎に、一坐の讚美せざるは莫し、述は正色して曰く、

「人は堯、舜に非らざれば、何ぞ事毎に善を盡くすを得んや！」

導は容を改めて之を謝す。

〔後趙〕〔石虎の南遊に建康動転し出兵〕 趙王の虎は南遊し、江を臨み而して還る。游騎十餘有りて歴陽に至り、歴陽太守の袁耽（えんたん）は表して之を上し、騎の多少は言わず。朝廷は震え懼れ、司徒の導は出でて之を討たんと請う。夏、四月、導に大司馬を加え、黃鉞を假し、征討諸軍事を都督せしむ。癸丑（16日）、帝は廣莫門（建康城北門）に觀兵し、諸將に分命して歴陽を救い、及び慈湖、牛渚、蕪湖（まも）を成らしむ。司空の郗鑒は廣陵相の陳光をして兵を將いて入りて京師を衛ら使む。俄に趙騎の至って少なく、又た已に去るを聞き、戊午（21日）、嚴を解き、王導の大司馬を解く。袁耽は輕妄（けいもう）（輕挙妄動）に坐して免官せられる。

〔後趙〕〔石遇は襄陽の桓宣を攻める〕 趙の征虜將軍の石遇は桓宣を襄陽に攻め、克たず。

■ 大いに早し、會稽、餘姚は米は斗ごとに五百（錢）。

▲ 秋、七月、慕容皝は子の儁を立てて世子と為す。

〔後趙〕〔趙の鄴遷都〕 九月、趙王の虎は（襄国から）鄴に遷都し、大赦す。

〔後趙〕〔趙の仏図澄の影響〕 初め、趙主の勒は天竺僧の佛圖澄（あらかじ）が豫め成敗を言いて、數々驗有るを以て、之に敬事す。虎の即位に及び、之を奉じるに尤も謹み、衣るに綾錦を以てし、乗るに雕輦（ちやうれん）（彫刻をし

た車)を以てす。朝會之日に、太子、諸公(石虎は諸子を公と為す)は扶翼して殿に上り、主者(朝儀を取り仕切る者)は、

「大和尚」

と唱え、衆坐は皆な起つ。司空の李農をして旦夕起居を問わしめ、太子、諸公(虎の諸子、虎は天王となり、諸子を王から公に降す)に五日に一朝せしむ。國人は之に化し、率^{おおむ}ね多く佛に事える。澄之在る所は、敢えて其の方面に向かいて涕唾する者無く、争いて寺廟を造り、髪を削りて出家す。虎は其の真偽雜糅^{ざつじゅう}(取り混ぜる)し、或は賦役を避けて奸宄(奸詐不法)を為すを以て、乃ち下詔して中書に問いて曰く、

「佛は、國家の奉ずる所なり。里閭(村落)の小人の爵秩無き者は、應に佛に事うべくや不や？」
著作郎の王度等は議して曰く、

「王者の祭祀は、典禮は具^{つぶさ}に存す。佛は、外國之神、天子諸華の應に祠奉すべき所に非ず。(6-079p) 漢氏は初め其の道を傳え(45 卷漢明帝永平八年の見える)、唯だ西域人の寺を都邑に立て以て之を奉じるを聽し、漢人は皆な出家するを得ず。魏の世も亦た然り。今宜しく公卿以下に禁じ、寺(初め官府を寺と言ったが、後漢明帝に西域の仏僧が白馬に乗り鴻臚寺に來たので白馬寺とす)に詣り焼香、禮拜するを得る^な母からしむべし。其の趙人の沙門と為る者は、皆な初服(元の華人の服)に返らしむべし。」

虎は詔して曰く、

「朕^{へんぴ}は邊鄙^{かたじけな}より生まれ、忝^{かたじけな}くも諸夏に君たり、饗祀に至りて、應に本俗に従うべし。其の夷、趙の百姓は佛に事えるを樂しむ者は、特に之を聽す。」

後趙趙の章武王の斌は精騎二萬並びに秦、雍二州の兵を帥いて以て**薄句大**(北羌王、去年斌を破る)を討ち、之を平らぐ。

大成 **[李期は謀反を押え、綱紀乱れる]** 成の太子の班之舅の羅演は、漢王(李壽)の相の天水の上官澹と成主の期を殺し、班の子を立てんと謀る。事は覺われ、期は演、澹及び班の母の羅氏を殺す。期は自ら志を得るを以て、諸々の舊臣を輕んじ、尚書令の景騫、尚書の姚華、田褒、中常侍の許涪等を信任し、刑賞大政は、皆な數人に決し、復た公卿に關するは希なり。褒は它才無く、嘗て成主の雄^{まれ}に期を立てて太子と為すを勧め、故に寵有り。是に由りて紀綱は隳^{きぶん}紊(崩れ乱れる)し、雄の業は始めて衰える。

■冬、十月、乙未(1日)朔、日食之れ有り。

▲ **[慕容仁逆襲失敗、東晋の使者は慕容皝に到来]** 慕容仁は王齊等(前年に仁に留めらる)を遣りて南に還らしむ。齊等は海道より棘城(熱河途昌黎郡昌黎県、現・朝陽市北票市)に趣き、齊は風に遇いて(海上だから)至らず。

十二月、徐孟等は棘城に至り、慕容皝は始めて朝命を受ける。

▲ **[段氏宇文氏仁への使者を皝は誅殺]** 段氏、宇文氏は各々遣使して慕容仁に詣り、平郭(奉天省遼瀋道蓋平県、現・營口市蓋州市)の城外に館す。皝の帳下督の張英は百餘騎を將いて間道潛行して之を掩撃し、宇文氏の使いの十餘人を斬り、段氏の使いを生きて擒とし以て歸る。

■是の歳、明帝の母の建安君荀氏は卒す。荀氏は禁中に在り、尊重せられること太后に同じ。詔して豫章郡君を贈る。

代 **[代の内乱]** 代王の翳槐^{えいかい}は賀蘭^{がらん}謨頭^{あいとう}(翳槐の舅、擁護の功あり)が不恭なるを以て、將に召し而して之を戮さんとし、諸部は皆な叛く。代王の紇那(前卷咸和四年に出奔の記事)は宇文部より入り、諸部は復た之を奉じ。

翳槐は鄴に奔り、趙人は厚く之を遇す。

前涼 〔張駿の富国強兵、西域諸国を制覇〕 初め、張軌及び二子の寔、茂は、河右を保ち據ると雖も、而も軍旅之事は歳として之れ無きは無し(毎年の事なり)。張駿の位を嗣ぐに及び、境内は漸く平らかなり。駿は勤めて庶政を修め、文武を總御し、鹹みなな其の用を得、民は富み兵は強く、遠近は之を稱し、以て賢君と為す。駿は將の楊宣を遣わして龜茲クチャ、鄯善を伐ち、是に於いて西域の諸國の焉耆、于闐ホータン之屬は、皆な姑臧に詣りて朝貢す。駿は姑臧の南に於いて五殿(謙光殿、東に宣陽青殿に春三月、南に朱陽赤殿に夏、西に政刑白殿に秋、北に玄武黒殿に冬居る)を作り、官屬は皆な臣を稱す。

前涼 〔張駿は秦州雍州併合に東晋に支援要請〕 駿は秦、雍を兼ねる之志有り、(6-080p) 參軍の麴護を遣わし上疏して、以て為す、

「**勒、雄**は既に死し、**虎、期**は逆を繼ぎ、兆庶(万民)は主を離れ、漸冉(段々に歳月を経る)として世を経る。先老消落し、後生(晉朝を)識らず、慕戀之心は、日々に遠く日々に忘れる。乞う司空の鑒(京口に鎮す)、征西の亮(武昌に鎮す)等ひとに敕して舟を江、沔に泛かべ、首尾齊しく舉げん。」

顯宗成皇帝中之上鹹康二年（丙申，336年）

■**春，正月**，辛巳（8日），彗星は奎、婁（28宿）に見える。

【慕容皝は遂に慕容仁を平郭に討つ】

▲ 〔高詡は海路で仁襲撃を進言〕 慕容皝は將に慕容仁を討たんとし、司馬の高詡は曰く、

「仁は叛きて君親を棄て、民神は(共に、続)怒る。此より前に海は未だ嘗て凍らず、仁の反きて以來、連年凍る者は三たびなり矣。且つ仁は専ら陸道に備える、天は其れ或る者は吾をして海冰に乗りて以て之を襲わ使めんと欲す也。」

皝は之に従う。群僚は皆な言うに、

「冰を渉るは危うき事なり、陸道に従うに若かず。」

皝は曰く、

「吾が計は已に決す、敢えて沮む者は斬る！」

▲ 〔平郭の慕容仁討伐、佟壽は高句麗に逃亡〕 壬午（19日）、皝は其の弟の軍師將軍の評等を帥いて昌黎の東より、冰を踐み而して進み、凡そ三百餘里。歷林口(海浦の口)に至り、輜重を捨て、輕兵にして平郭に趣く。城を去ること七里、候騎は以て仁に告げ、仁は狼狽して出でて戦う。張英トリコ之二使を俘にする也(前年にあり)、仁は窮追せざるを恨む。皝の至るに及び、仁は以為らく皝は復た偏師を遣わして輕く出でて寇抄せしむと。皝が自ら來たるを知らず、左右に謂って曰く、

「今茲いまここは當に其の匹馬をして返るを得使めざるべし矣！」

乙未（32日？）、仁は衆を悉くして城之西北に陳ず。慕容軍(咸和八年に仁に捕らえられる)は所部を帥いて皝に降り、仁の衆は沮みて動く。皝は従い而して縱撃し、大いに之を破る。仁は走り、其の帳下は皆な叛し、遂に之を擒とす。皝は先ず為に其の帳下之叛く者を斬り、然る後に仁に死を賜わる。丁衡、游毅、孫機等、皆な仁の信用する所也、皝は執り而して之を斬る。王冰は自殺す。慕容幼、慕容稚、佟壽、郭充、翟楷、龐鑒は皆な東に走り、幼は中道に而して還る。皝の兵は追いて楷、鑒に及び、之を斬る。壽、充は高麗に奔る。自餘の吏民は仁の誑誤する所と為る者は、皝は皆な之を赦す。高詡を封じて汝陽侯と為す。(冬寿289-

357、高句麗に逃亡、爵位は樂浪相。墓は1949年に黄海道安岳郡で発見された安岳3号墳。複雑な構造の回廊・石室の壁面が彩られた壁

■**二月**，尚書僕射の**王彬**は卒す。

■**辛亥**（19日），**帝**は軒に臨み，遣使して六禮（納采、問名、納吉、納徵、請期、親迎）を備え、故の當陽侯の**杜乂**の女の**陵陽**を逆えて**皇后**と為し，大赦す。群臣は畢く賀す。

▲**〔慕容皝は段・宇文の侵入撃破〕****夏，六月**，**段遼**は中軍將軍の**李詠**を遣わして**慕容皝**を襲わしむ。詠は**武興**（令支の東、直隸省津海道遷安県、現・唐山市遷安県）に趣き，都尉の**張萌**は撃ちて之を擒える。**遼**は別に**段蘭**を遣わして歩騎數萬を將して**柳城**の西の回水（晉書載記には曲水）に屯せしめ，宇文の**逸豆歸**は安晉（咸安八年皝が築く）を攻めて以て**蘭**の聲援と為す。**皝**は歩騎五萬を帥いて柳城に向い，**蘭**は戦わず而して遁げる。**皝**は兵を引きて北に安晉に趣き，**逸豆歸**は輜重を棄てて走る。**皝**は司馬の**封弈**を遣わして輕騎を帥いて追撃せしめ，大いに之を破る。**皝**は諸將に謂って曰く、(6-081p)

「二虜は功無きを恥じ，必ず將に復た至らんとす，宜しく柳城の左右に於いて伏を設けて以て之を待つべし。」

乃ち**封弈**を遣わして騎數千を帥いて馬兜山に伏せしむ。**三月**（?、七か八月），**段遼**は果たして數千騎を將いて來たりて寇抄す。**弈**は縱撃し，大いに之を破り，其の將の**榮伯保**を斬る。

■**前**（既に病で辭職す）の廷尉の**孔坦**は卒す。**坦**は疾い篤く，**庾冰**は之を省（見舞い）し，流涕す。**坦**は慨然として曰く、

「大丈夫は將に終わらんとす，問うに國を濟い民を安んずる之術を以てせず，乃ち兒女子のごとく相い泣くを為す邪！」

冰は深く之を謝す。

▲**〔慕容皝は徐孟を建康に送らせる〕****九月**，**慕容皝**は長史の**劉斌**、兼郎中令（晉の制度では王国に郎中令を置くが、未だ王ならず僭称）の遼東の**陽景**を遣わして**徐孟**等を送りて建康に還らしむ。

■**〔東晉は夜郎を討つ〕****冬，十月**，廣州刺史の**鄧岳**は督護の**王隨**等を遣わして夜郎（懷帝の永嘉五年に王遜は牂柯・朱提・建寧を分けて夜郎郡を置く、現・雲南省東部・貴州省南西部）、**興古**（蜀の劉氏は建寧・牂柯を分けて興古郡を立てる、現・雲南省南東部）を撃ち，皆な之に克つ。**岳**に督寧州（晉南北朝時代設置、現・貴州省西部、後に甘肅省に同名あり）を加える。

大成 **〔大成の李載の誅殺〕**成主の**期**は從子の尚書僕射の武陵公の**載**の俊才有るを以て，之を忌み，誣うるに謀反を以て，之を殺す。

■**大成** **〔司馬勳は漢中に侵入、李壽は破る〕****十一月**，建威將軍の**司馬勳**に詔して兵を將いて漢中を安集せしむ。成漢王の**壽**は撃ちて之を敗る。**壽**は遂に漢中の守宰を置き，南鄭を成らしめ而して還る。

後趙 **〔索頭は趙に降る〕**索頭（鮮卑の一種）の**郁鞠**は衆三萬を帥いて趙に降り，趙は**郁鞠**等十三人を拜して親趙王と為す，其の部衆を冀、青等六州に散じる。

後趙 **〔趙王石虎の大建築・奢侈・横暴で民艱苦〕**趙王の**虎**は太武殿を襄國に作り，東、西宮を鄴に作る，**十二月**，皆な成る。太武殿の基の高さは二丈八尺，縦は六十五步，廣は七十五步，甃（敷き瓦、石畳）は文石を以てす。下には伏室（窟室、地下室）を穿ち，衛士五百人を置く。漆を以て瓦に灌ぎ，**金璫**（金で瓦の縁を飾る），**銀楹**（銀柱），**珠簾**，**玉壁**，工巧は窮極なり。殿上には白玉の床、**流蘇**（房）の帳を施し，**金蓮華**を為り以て帳頂に冠とす。又た九殿を顯陽殿の後ろに作り，士民之女を選び以て之を實たし，**珠玉**を服し，**綺縠**（あやぎぬ）を被る者萬餘人あり。宮人に教えて星氣を占い，馬步射せしむ（ある者は馬に乗り、ある者は歩い

て射る)。女太史を置き、及び雑伎工巧するは、皆な外と同じ（宮人をして執作すること、男子の如く）。女騎千人を以て鹵簿と為し、皆な紫綸の巾、熟錦の褲、金銀鏤の帶、五文（五色）の織成の靴を著け、羽儀（天子の行列の指揮の旗）を執り、鼓吹を鳴らし、游宴し以て自ら隨う。是に於いて趙は大旱となり、金一斤は粟二門に直し、百姓は嗷然たり。而るに虎は兵を用いること息まず、百役は並びて興る。牙門將の張彌をして行き、洛陽の鐘虞、九龍、翁仲、銅駝、飛廉（皆魏の明帝の作る物）を鄴に従さしめ、載せるに四輪の纏輶車、輶の廣さ四尺、深さ二尺なるを以てす。一鐘は河に没し、(6-082p) 浮没（潜水夫）三百人を募りて河に入り、系ぐに竹絲互（続は竹經）を以てし、牛百頭を用い、鹿盧（轆轤）にて之を引き、乃ち出で、萬斛之舟を造りて以て之を濟す。既に鄴に至り、虎は大いに悦び、之が為に二歳の刑を赦し、百官に穀帛を賚い、民に爵一級を賜う。又た尚方（工作方）令の解飛之言を用い、鄴の南に於いて石を河に投げ、以て飛橋を作り、功費は數千萬億にして、橋は竟に成らず、役夫は饑えること甚しく、乃ち止む。令長をして民を帥いて山澤に入り橡及び魚を採り以て食を佐けしめ、復た權豪の奪う所と為り、民は得る所無し。

■ 【日南の範文は国を奪取して東晋に朝貢す】 初め、日南の夷帥の范稚に、奴有りて範文と曰う、常に商賈に隨いて中國に往來す。後に林邑に至り、林邑王の范逸に教え城郭、宮室、器械を作らしめ、逸は愛して之を信じ、將と為らしむ。文は遂に逸の諸子を譖り、（諸子は）或るは徙され或るは逃げる。是の歳、逸は卒し、文は詐りて逸の子を它國より迎え、毒を椰酒（椰子の酒）に置き而して之を殺し、文は自ら立ちて王と為る。是に於いて兵を出して大岐界、小岐界、式僕、徐狼、屈都、乾魯、扶單等の國を攻め、皆な之を滅ぼし、衆は四五萬有り、遣使して奉表して入貢す。

後趙 趙の左校令の成公の段は庭燎（夜間、庭で焚いて照明とする火）を楨（旌旗の竿）末に作り、高さは十餘丈、上盤に燎を置き、下盤に人を置き、趙王の虎は試み而して之を悦ぶ。

顯宗成皇帝中之上鹹康三年（丁酉， 337年）

後趙 【石虎は大趙天王と稱す】 春，正月，庚辰（53日？曆不明），趙の太保の夔安等の文武五百餘人は入りて尊號を上る。庭燎の油を下盤に灌ぎ、死者は二十餘人なり。趙王の虎は之を惡み、成公の段を腰斬す。辛巳（54日？），虎は殷、周之制に依り、大趙天王と稱し、南郊に於いて即位し、大赦す。其の後の鄭氏を立てて天王皇后と為し、太子の遼を天王皇太子（後趙独自の名称）と為し、諸子の王為る者は皆な降して郡公と為し、宗室の王為る者は降して縣侯と為す。百官は署に封じて各々差有り。

■ 【大学を建てるも儒術は振るわず】 國子祭酒の袁瑰、太常の馮懷は、江左の浸安きを以て、學校を興すを請い、帝は之に従う。辛卯（64日？、二月12日位か）、太學を立て、生徒を徵集す。而るに士大夫は習いて老、莊を尚び、儒術は終に振わず。瑰は、渙之曾孫也。

▲ 【慕容皝と段遼の攻防】 三月，慕容皝は乙連城（段氏の東境、大凌河の西、朝陽市の西南近く）の東に於いて好城を築き以て乙連に逼り、折衝將軍の蘭勃を留めて之を守らしむ。夏，四月，段遼は車數千兩を以て乙連の粟を輸び、蘭勃は撃ち而して之を取る。六月，遼は又た其の從弟の揚威將軍の屈雲を遣わして、精騎を將いて夜に皝の子の遵を興國城（慕容氏が築く）に襲わしめ、遵は撃ちて之を破る。

▲ 【陽裕は慕容氏との段遼に善隣を求めるも聞かず】 初め、北平の陽裕は段疾陸眷及び遼の五世（疾陸眷・

沙復辰・末柘・牙・遼)に事え、皆な尊禮せ見れる。遼は數々眦と相い攻め、裕は諫めて曰く、(6-083p)

『仁を親しみ善鄰するは、國之寶也。』(左傳の陳五父の言)況んや慕容氏は我と世々婚し、迭に甥舅と為る、眦は才徳有り、而るに我は之と怨みを構える。戦いて虚月無く(毎月、いつも)、百姓は凋弊し、利は害を補わず、臣は恐るは社稷之憂いは將に此に由りて始まらんとする。願はくは兩つながら前失を追い、通好すること初めの如し、以て國を安んじ民を息めん。」

遼は従わず、裕を出して北平相と為す。

【後趙皇太子誅殺】

後趙「趙太子遼は石虎殺害を謀り、一族誅殺される」趙の太子の遼は素より驍勇あり、趙王の虎は之を愛す、常に群臣に謂って曰く、

「司馬氏の父子兄弟は自ら相い殘滅す、故に朕をして此に至るを得使める。朕の如きは阿鐵(遼の字)を殺す理有りや否や？」

既に而して遼は驕淫殘忍なり、好みて美姫を妝飾(続は粧飾)して、其の首を斬り、血を洗いて盤上に置き、賓客と傳えて之を觀て、又た其の肉を煮て共に之を食う。河間公の宣、樂安公の韜は皆な虎の寵有り、遼は之を疾んで仇の如し。虎は酒色に荒耽し、喜怒は常無し。遼をして尚書事を省可せ使め、關白する所有る毎に、虎は恚りて曰く、

「此れは小事なり、何の白すに足る也！」

時に或いは聞かざれば、又た恚りて曰く、

「何を以て白わざるや！」

誚責し答極すること、月に再三に至る。遼は私かに中庶子の李顔等に謂って曰く、

「官家(天子)は稱い難し(気に入られるのは難しい)、吾は冒頓之事(父を殺して代わりに立つ、11 卷漢高帝六年に見える)を行わんと欲す、卿は我に従う乎？」

顔等は伏して敢えて對えず。秋、七月、遼は疾と稱して事を視ず、潜かに宮臣文武五百餘騎を帥いて李顔の別捨に飲み、因りて顔等に謂って曰く、

「我は冀州(信都に治す)に至りて河間公を殺さんと欲す、従わざる者有れば斬る！」

行きて數里にして、騎は皆な逃げ散る。顔は叩頭して固く諫め、遼も亦た昏醉し而して歸る。其の母の鄭氏は之を聞き、私かに中人を遣わして遼を誚讓す。遼は怒り、之を殺す。佛圖澄は虎に謂って曰く、

「陛下は宜しく數々東宮に往くべからず。」

虎は將に遼の疾いを視んとし、澄の言を思い而して還る。既に而して目を瞋らして大言して曰く、

「我は天下の主為り、父子は相い信ぜざらん乎！」

乃ち親信する所の女尚書に命じて往きて之を察せしむ。遼は前に呼びて與に語り、因りて劍を抽きて之を撃つ。虎は怒り、李顔等を收めて詰問し、顔は具に其の狀を言う。顔等三十餘人を殺す。遼を東宮に幽し、既に而して之を赦し、太武東堂(魏の武帝は鄴に居り北宮を作り文當殿あり。石氏はそこに東西大武二殿を作る)に引見す。遼は朝し而るに謝まらず、俄頃にして即ち出ず。虎は(人をして)之に謂わ使めて曰く、

「太子は應に中宮に朝すべし、豈に遽に去る可けんや！」

遼は徑ちに出でて、顧みず。虎は大いに怒り、遼を廢して庶人と為す。其の夜、遼及び其の妃の張氏を殺し、並びに男女二十六人を同じく一棺に埋める。其の宮臣支黨の二百餘人を誅す。鄭后を廢して東海太妃と為す。其の子の宣を立てて天王皇太子と為し、宣の母の杜昭儀を天王皇后と為す。

後趙 **〔大秦国から来たと称する侯子光の乱〕** 安定の侯子光は、自ら佛太子と稱し、雲う、

「大秦國（ローマ帝国）より來たる、當に小秦國（中国）に王たるべし」（6-084p）

衆數千人を杜南山（京兆の杜陵県、陝西省關中道長安県、現・西安市長安区）に聚め、大黃帝と自稱し、改元して龍興とする。石廣は討ちて之を斬る。

▲ **〔慕容皝は燕王と称する〕** 九月，鎮軍左長史の封奕等は慕容皝に燕王を稱するを勧める。皝は之に従う。是に於いて群司を備置し、封奕を以て國相と為し、韓壽を司馬と為し、裴開を奉常と為し、陽鶩を司隸と為し、王寓を太僕と為し、李洪を大理と為し、杜群を納言令（晉の尚書令）と為し、宋該、劉睦、石琚を常伯（晉の侍中）と為し、皇甫真、陽協を冗騎常侍（晉の散騎常侍）と為し、宋晃、平熙、張泓を將軍と為し、封裕を記室監と為す。洪は、臻（87 卷懷帝永嘉三年に見える）之孫、晃は、爽（88 卷愍帝建興元年に見える）之子也。冬，十月，丁卯（14日），皝は燕王に即位し、大赦す。十一月，甲寅（32日？），武宣公（慕容廆）を追尊して武宣王と曰い、夫人の段氏を武宣后と曰う。夫人の段氏を立てて王后と為し、世子の儁を王太子と為し、魏武、晉文の政を輔けるの故事の如し。

▲ **〔燕は趙に称藩し、段氏挾撃を図る〕** 段遼は數々趙の邊を侵し、燕王の皝は揚烈將軍の宋回を遣わして趙に稱藩せしめ、師を乞いて以て遼を討たんとし、自ら盡く國中之衆を帥いて以て之に會さんと請い、並びて其の弟の寧遠將軍の汗を以て質と為す。趙王の虎は大いに悦び、厚く慰答を加え、其の質を辭し、遣りて還し、密かに期は以て明年とす。

後趙 **〔拓跋翳槐は盛樂に築城し代王〕** 是の歲、趙將の李穆は拓跋翳槐（元年に趙に降る）を大寧に納れ、其の故の部落は多く之に歸す。代王の紇那は燕に奔り、國人は復た翳槐を奉じて代王と為し、翳槐は盛樂に城きずき而して之に居る。

仇池 仇池の氏王の楊毅の族兄の初は、襲いて毅を殺し、並せて其の衆を有ち、自ら立ちて仇池公と為し、趙に臣と稱す。

（この巻の曆については、元嘉曆・儀鳳曆からの類推では確定しがたい）

令和3年4月5日 翻訳開始 11376 文字

令和3年4月12日 翻訳終了 22967 文字

令和3年11月27日 書下し終了 23782 文字